

全科協ニュース

URL <http://jcsm.kahaku.go.jp>

全国科学博物館協議会 ☎110-8718 東京都台東区上野公園 独立行政法人国立科学博物館 Tel.5814-9863 Fax.5814-9898 平成18年5月1日発行（通巻第208号）

平成17年度海外科学系博物館視察研修報告

平成17年度海外科学系博物館視察研修（平成18年1月15日～26日）では、オーストラリア・ニュージーランドの5施設を公式訪問しました。各施設について、「管理・運営」「展示」「教育普及活動」の観点から報告いたします。



2006 日豪交流年

I. 管理・運営

【メルボルン博物館】

メルボルン博物館は、ビクトリア州立博物館機構の4つの博物館の一つで、1854年に設置された歴史ある総合博物館であり、同機構の中心となる博物館である。また、2000年、市の中心部にリニューアルオープンした新しい博物館でもある。展示は、自然史、歴史、文化、民俗、人体と幅広く扱っている。

管理運営については、ビクトリア州博物館機構として一体に行われており、年間予算は、9000万AUS\$（約80億円）。収入の80%程度が州政府、連邦政府からの運営費である。自己収入は、入館料（大人6AUS\$、子ども無料）、駐車場、IMAXシアター、会場貸し、カフェ、ショップ売り上げと、年間300万AUS\$程度（約2億6千万円）の利益があり館運営における経営努力を手広く行っている印象を受けた。

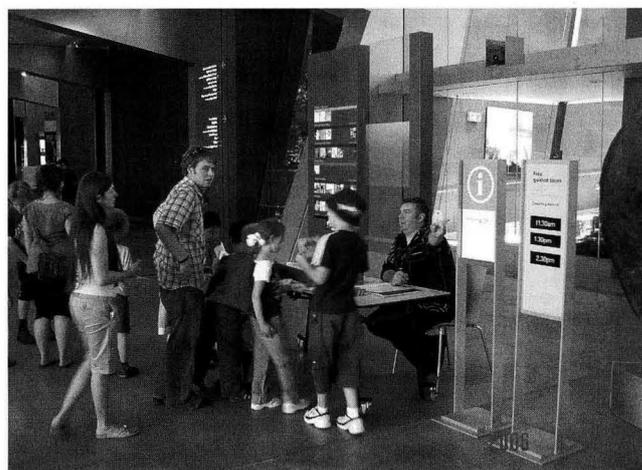
職員数は、常勤スタッフが457人と多く、ボランティアは、メルボルン博物館だけで年間287人、延べ時間数にして11693時間が、展示解説の補助や、スクールプログラム、いくつかの特別展示などを手伝っているとのことで、積極的に展開されている印象を受けた。

コレクション数は1600万を超え、年間利用者は、4館で約117万人。メルボルン博物館だけで約67万人とのことである。他に、ディスカバリープログラム参加者が約5万人、WEBサイト利用者が282万人である。規模としては、南半球で最大級の博物館の一つで、全体として、州政府等からの手厚い資金、豊富なスタッフによって、安定した運営が行われていることが覗かれた。

【サイエンスワークス】

サイエンスワークスは、ビクトリア州立博物館機構の科学館として1992年に市の郊外に開館した比較的新しい施設である。展示は、参加体験型が中心で子どもたちに興味を持たせるため家庭内の科学、法科学（犯罪捜査の科学）といった身近な科学をわかりやすく解説しているのが印象的であった。他に、人気施設のプラネタリウムがあり、また、蒸気ポンプの動態保存を行い産業技術の展示にも力を入れている。

管理運営は、機構として一体に行っている。入館者数は、年間37万人であり、そのうちの8～10万人が教育プログラムの入館者である。教育プログラム入館者のうち約60%が



メルボルン博物館

小学生、他が中学生である。ユニークな点は、教員用の教育プログラムも用意されており、また、稲妻の発生展示施設を使って大学との連携教育を行っている。サイエンスワークスは、様々なプログラムで学校と協力し、州内の教育活動を支援していく中核的な施設であり、その役割の高さが認められた。

【オーストラリア博物館】

オーストラリア博物館は、ニューサウスウェールズ州によって「自然と文化を探求させる」を使命として、1827年に設置されたオーストラリアで最も古い博物館である。自然史を中心とする総合博物館で、先住民アボリジニの資料も数多く展示している。教育普及事業においても力を入れており、ディスカバリールームや5歳以下の幼児向け展示室（キッズアイランド）などを併設して、楽しみながら学習できるように工夫されているのも特徴のひとつである。

予算は、州政府からの運営費の他に、特別展を開催する際の特別予算が認められている。職員数は非常勤を含み276名で、内、研究者は70名程である。収蔵品は、500万以上の昆虫、100万以上の魚、10万以上の哺乳類と鳥類、100万以上の考古学上の道具、11万以上の民俗学資料、そして7万以上の岩石と鉱物と膨大にあるが、その内の約1%が展示してあるのみである。館の延床面積は、7,000m²で、常設展示スペースが10箇所と特別展示スペース大4箇所・小6箇所と大規模である。古い建物の展示スペースは手狭感や展示の古さが感じられたが、改装予定との事であった。

年間来館者数は、約33万6千人でその内、学生利用者の数は、約5万1千人（15.2%）となっている。職員数は非常勤を含み276名で、内、研究者は70名程。他にボランティアの156名が職員の補助として働いている。

館の年間計画・特別展等の検討は、州に任命された特別理事9名が行っている。ユニークな点は、科学者・ビジネスマン・店主といった様々な職種の者が理事になっていることである。社会の様々な構成員の代表が地域に開かれた博物館として運営を担っていることは、特筆すべき点である。また、マーケットリサーチ担当職員を配置し、常に望まれる博物館でありたいという思いが感じられた。

【パワーハウス博物館】

パワーハウス博物館は、科学技術に関するコレクションの充実及び展示を通じて科学技術の理解と、創造の場を市民に提供し社会に貢献することを目的に、1988年に市内の

発電所跡地に設置された。

展示は22の常設展示場と5つの特別展用の展示室を有し、科学技術の博物館として展示情報システムに力を入れており、映像展示やKIOSK端末による最新の展示情報システムが充実しているのが驚きであった。

博物館の運営は、独立した法人で任期3年の理事10名が行っており、年間予算は4800万AUS\$（約42億円）、その80%が州政府からの運営費であり、残り20%は入場料、売店イベント収入、寄付金等で運営している。運用スタッフは325名、内35名が学芸員であり全体の20%はボランティアと非常勤である。収蔵品は38万5千点であり、内、1万点余りが展示されている。

歴史、科学、工業、デザイン、産業、装飾アート等のユニークで多様なコレクションが展示されており、操作、体験学習ができることに重点が置かれ、特に蒸気エンジンの動態展示は迫力があり印象的であった。年間入場者は本館で78万人（天文台含む。）、移動博物館の利用者が7万人である。また、各種教育プログラムを実施しており、移動博物館や館内で教育用のPC教室、デジタル工房、ミュージックラボ等のワークショップを積極的に実施し、子供たちの生き生きとした顔が見られた。

特筆すべきは、展示の製作、保守は全て自前でやっていることである。そのために、予算の10%以上をかけ即時の保守対応体制を有し、保守担当者は展示品の制作段階から参加することで展示品の稼働率向上を図っている。パワーハウス博物館は、展示に対し、非常にこだわりを持つその姿勢は、高く評価されるべきであろう。

【ニュージーランド国立テパパ博物館】

国立テパパ博物館は、首都ウェリントンにある総合博物館で、従来の美術館と博物館との統廃合、先住民のマオリ文化とイギリス系の文化との調和といった政策的理由により1998年にリニューアルオープンした。

展示は、6階建ての2つのビルに歴史、自然史、芸術、先住民マオリ族に関する資料を展示し、また、アトラクション的なゲームコーナーや子供博物館としての施設もあり一日中楽しめる博物館となっている。

テパパの入館者は、年間130万人以上あり、入館者数から見ると南半球で4年連続1位で非常に人気がある博物館である。また、このような大規模な施設は、この地域では数少ないことから一つの娯楽施設の役割を担っているように

感じられた。

年間の運営予算は、3600万NZ\$ (約29億円) で、政府から2000万\$ (約56%)、自己収入としてカフェやレストランの売上げ、スポンサーからの出資、会場の賃貸料、特別展の入場料、CM料収入がある。また、常設展の入館料は、無料である。

職員数は約500名で常勤及び非常勤が半々程度である。職種別では、学芸員が約50名、管理・運営のディレクターが約20名、その他、事務スタッフが40～50名程度となっている。

運営組織に特徴があり、最高責任者2名の内、1人は必ずマオリ族出身者が就任しているとのことである。複数の文化を総合博物館としてどのように展示していくかは、非常に慎重さが必要であると考えられる。しかし、2つの文化の融和が進んでいるニュージーランドにあって、テパパは、自然科学と歴史や文化とのバランスへの配慮が感じられる素晴らしい博物館であった。

交通博物館 荒木文宏

環境エネルギー館 花淵盛一

㈱丹青社 田村和彦

パナソニックSSマーケティング㈱ 森下幸平

国立科学博物館 三浦一男、那須真由美、福井 彰

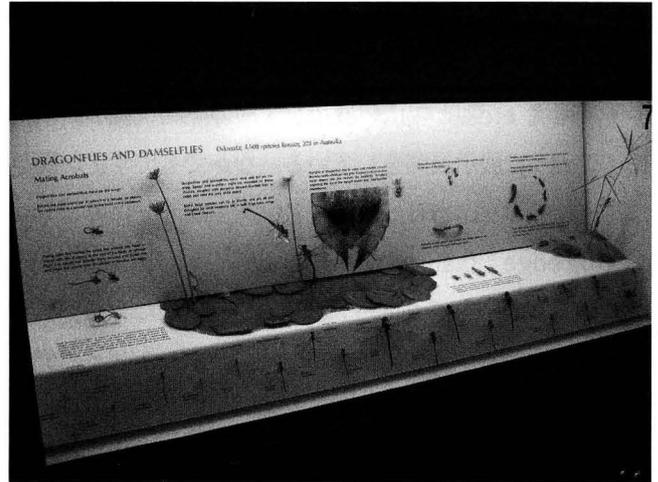
II. 展 示

【オーストラリア博物館】

一般来館者が利用するパブリックスペースは9つのテーマで構成されている。先住民族の展示はあるものの、鉱物や動植物標本の占める割合が大きく、自然史博物館の印象が強い。

●随所で見られる、標本に目を向けさせる心くばり

「Birds&Insects」では、鳥たちの標本が生き活きとしたポーズで展示され、巣や卵などの生活史を物語る資料も豊富に配置されている。昆虫は生息環境や生活史の断面を想起させるシーンジオラマが多数用意され、そこを舞台に、生態的特徴を表すシーンづくりが標本を使って行われている。鳥・昆虫双方に共通するのは、標本となった生物が生きていた様子を彷彿させる扱いがなされ、全ての標本に暮らしぶりを示すシーン設定が施されていた点である。分類学的興味よりも生態学的興味に応える標本の展示活用の考え方が徹底されているように感じられた。もう一つ、展示



「Birds&Insects」

生物たちの暮らす現場の一瞬を捉えたような標本の見せ方

することへの意思が感じられた一コマとして、展示関係者を明示するパネルを見つけた。研究者・教育者・設計者・制作者といった専門技能を有する人員を紹介するパネルは責任ある展示計画の存在を窺わせた。

●サービス意識の強さがしみ出る空間づくり

「Search & discover」は、一つの大きな展示部門同等の規模・設備で調べ学習や質問に応える充実した環境・設備を持ち標本展示室に負けない程の賑わい。「Kids' Island」は、利用者を5歳以下の子どもとその親に限定したプレイランド空間で、安全に楽しく博物館らしいアイテムと戯れながら時間を過ごせる場だ。それぞれがパブリックスペース全体に占める割合はかなり大きい。こうした空間も現代の余暇・学習行動に見合ったサービス意識・体制が館側にあってこそ成立するといえるだろう。訪問時に行わせていただいた取材によれば、マーケティングの専門家が運営組織の中に配置されているという。1827年にオーストラリア最初の博物館として開館した歴史ある館として、常にユーザーニーズを把握し、日々の事業運営・環境整備が行われていることが推察された。来館者が真っ先に身を置くエントランスは外光の入り込む明るい空間で、カウンターには沢山の生き物たちの標本がお出迎えしてくれ、施設導入部をフレンドリーな雰囲気演出していた。

【パワーハウス博物館】

もともと発電所として使用されていた施設を利用して作られた科学館である。当初は蒸気機関をメインに科学技術展示を中心に扱っていたが、「広範囲な展示テーマが、幅広

い来館者を促す」というミッションステイトメントのもと、交通輸送・発明・オーストラリアの生活の変遷・デザイン・IT・環境 etc... と幅広い展示を4層の空間（展示面積約10,000m²）で展示展開をしている。なかでもデザイン展示は充実しており、当日は、アジアギャラリーにて「The cutting edge : fashion from Japan」、「Kylie an exhibition」と服飾関連の企画展を開催していた。またデザインを専攻する学生の卒業制作展のスペースがあったりと、デザインミュージアムとしての印象が強い。

●キッズスペース（Kids Interactive Discovery Spaces）の充実

館の特性上、コレクション展示がメインであったが、幅広い来観者に対応する為、キッズ向け展示の充実を図っている。特に2006年1月にオープンした「The Pocket」は幼児対象の施設で、お絵かき・キャラクターの着せ替えが人気を集めていた。少々高学年向けの「Sound House」ではパソコンで音楽編集のノウハウを知ることが出来る。また階段下の館内デッドスペース3箇所キッズ向けのハンズオン装置を設置している（Kids Interactive Discovery Spaces）。特撮映像の編集装置や、足で弾くピアノなど、子供たちの長い列が続いていた。今回の視察で強く感じたことであるが、オーストラリアの博物館ではキッズスペースにしっかりとスペースを確保するとともに、運営面でのサポートも充実しているものであった。

株式会社 乃村工藝社 叶地剛司、亀山裕市、横山昌昇

【ニュージーランド国立テパパ博物館】

ウェリントンの海沿いでひととき目を引くモダンな建物、足を踏み入れると、その展示もモダンかつ斬新であった。広々とした5階建ての吹き抜けに贅沢なくらいの展示が展開されている。おもなテーマは、先住民族である「マオリ族」と19世紀にヨーロッパから移り住んだ人々の歴史・文化である。

マオリとヨーロッパの両文化を柱にした総合博物館であるため、展示にも「いかにストーリー性をもたせて1国2文化を伝えるのか」という工夫と試みがみられた。例えば、天体の展示では、現代科学による解説と平行して、マオリの人がみた星などが紹介されている。クジラの骨格コーナーにはマオリに伝わるクジラの話のパネルもある。これは2文化理解のための自然科学と人文科学の融合展示といえよう。また、同じフロアに、マオリ族の集会場や日

常生活の紹介と、ヨーロッパからの移民の150年の歴史が展示されている。

日本の多くの総合博物館では、同じ建物の中に自然・人文・美術系の展示室が独立しているだけというのが現状である。テパパのように、明確なテーマにそって各分野を融合させ、展示ストーリーを組むことは、日本の総合博物館にとって参考になると思われた。ただ、融合展示は雑多になりやすいのも事実であり、テパパ博物館が彼らの意図するメッセージの伝達にどの程度成功しているのか、評価システムの確立も重要であると思われた。

自然系の展示では誌面の都合で2点のみ報告する。まず、地震や火山活動については、模型や体験型展示を駆使してわかりやすく紹介されていた。ニュージーランドは地震が多く、近い将来、大きな地震がくると予測されているらしいが、防災意識の普及のためには、子どもの頃から活断層などのしくみを理解しておくことが一番の近道ではないかと感じた。日本も地震国であり参考になるであろう。

次に動物相の展示である。古くから各大陸と隔離していたニュージーランドには、キーウィなどの特異な動物が生息している。オーストラリアにいる有袋類もいない。こういった特異な動物相の展示には期待していたが、少々もの足りなかった。自然史博物館ではないので仕方ないのかも



国鳥でもあるキーウィの展示コーナー

しれない。また、古い標本はみられず、欧米の博物館のような莫大なコレクションは所蔵していないように感じられた。そもそも独立して60年ほどの歴史しかなく当たり前なことなのだろう。この点は、背景は違っても日本とよく似た状況であるとも思われた。欧米博物館の世界中から集められた莫大なコレクションは、言いかえれば「略奪の歴史」であり、私には「人間の所有欲のかたまり」として映るときもある。博物館の価値は、コレクションの数を競い合うことでなく、自らの過去を真摯に見つめ、そこから学び、未来を創っていくところにあると気持ちを新たにした。

鳥取県立博物館 川上 靖

III. 教育普及活動

オーストラリア、ニュージーランド両国の博物館における教育普及活動の特徴を考えるにおいて、両国が持つ移民国家としての特性を抜きに考えることはできない。

両国は、先住民と欧州を中心とした移民が共存する社会で構成されており、政府は、この一国二文化の国において、それぞれの文化や歴史を互いに伝え合い、ともに共生していくための相互理解の場として、その役割の一端を博物館に求めているからである。

互いの文化を認め合うことにより、それまでと違った視点から物事を見つめ、そして学ぶ。

博物館が提供する教育プログラムは、学ぶための「きっかけ」であり、目的とするものは自らが観察し、疑問を持ち、考えること。

年齢や人種、分野に拘らず二つの文化が融合し、他国にない独自の文化を育む。この考えを一つの要素として、各博物館はもとより、行政、教育現場、地域住民等々の意見を反映しながらプログラムは作り上げられ、両国の博物館における教育普及活動の基礎を形成しているものと思われる。

以下、具体例として今回の研修において公式訪問した各館の教育普及活動の現状をご報告する。

船の科学館 宮田 勉

【メルボルン博物館】

メルボルン博物館では、学校教育のカリキュラムとの関連を図って教育プログラムの作成を行っている。そのために、州政府の教育指導者の下で話し合っその内容を決めたり、地域の人や学校の教職員の代表者で委員会をつくり、将来の教育プログラムについての開発を行ったりしてい

る。また、博物館に対してどのようなことを期待しているかを保護者対象のアンケート調査によって具体的に調べ、その具現化に努めている。

例えば、博物館を訪問した小学生がより科学に没頭するために、以下のような興味・関心を引く開発プログラムを長期的に提供している。

- ①「Marine life : Exploring our seas (海の生き物：海の探究)」大洋に住む驚くべき生物について学ぶプログラム
- ②「Bugs Bugs Bugs! (小さな生き物たち)」昆虫たちの驚くべき世界について学ぶ対話型プログラム
- ③「Forest Secrets (森林の秘密)」博物館内にあるヴィクトリア州の植生を再現した中庭を探検し環境や森林の変遷について学ぶプログラム
- ④「Dinosaurs in Time (恐竜時代)」数億年の歴史を語る化石に実際に触れながら学ぶプログラム

この他にも開発プログラムは、幼児用や中学生用、大人用、教師用等が用意されている。

また、オンラインで、オーストラリアの広い範囲の情報、話題のウェブサイト、利用可能な研究出版物を「教育キット」と題して公開している。これら情報は、州の博物館機構（ミュージアム・ヴィクトリア）の研究や収集に基づいたものである。

加えて、広大なヴィクトリア州の各地域にトラックを利用して展示物を運び、コミュニティーセンターや学校、病院などでより多くの子どもたちに「移動博物館」として科学展示品にふれる機会を与えていることも大きな教育普及活動の一つである。

浜松科学館 松本孝久

【サイエンスワークス】

1992年に開館したサイエンスワークスは、あらゆる年齢層の人々が楽しめる科学技術センターである。大学との共同で運営している静電気の部屋をはじめ、屋内外の展示物はそのほとんどが実際に触れたり、実験したりすることができ、過去、現在、未来の科学が楽しみながら学べる施設で、プラネタリウムも併設している。

これらの施設では来館者がより楽しく学べるよう、様々な教育プログラムが普及活動として行われている。その特徴としては、サイエンスショーやプラネタリウムの番組などのプログラムが、対象年齢を細かく明確に区切ったものであることが挙げられる。子供用教育プログラムの広報パ

ンフレットも、小学校用と中学校用があり、家族で利用したり、学校で利用したりする際のガイド的役割を担っている。また、事前予約・別料金で、半日や一日、より深く学びたい利用者のために職員が希望のプログラムに沿ってガイドしながら施設を利用することもできる。さらに、学校の教師向けに有料のワークショップも開催し理解を助けたり深めたりする活動にも力を入れている。

こうした教育プログラムは、サイエンスワークスの職員だけでなく、メルボルン州の他の博物館等の職員との共同でつくられたものも多く、学校や大学との連携の機会も確保されている。

盛岡市子ども科学館 佐々木瑞穂

【オーストラリア博物館】

オーストラリア博物館の教育普及への取り組みとしては、第一に教育機関と連携したMuseum in Box (http://www.austmus.gov.au/museum_box/) という移動展示があげられる。これはリクエストがあった州内の学校に向いてワークショップを実施するというプログラムで、年間でのべ5万人が参加している。上記のサイトやFAXから訪問を希望する教員が気軽に予約ができるようになっていく。リクエストがあった場合は、その地区の、以前にワークショップに参加した、または来館したことのある学校に対して、「そちらの方面に訪問することになりましたので、この機会に訪問させてください」という営業をして効率的

に巡回展示を展開しているとのことである。また、館内にディスカバリーセンターが設けられており、常駐している学芸員に気軽に質問ができる環境が整えられている。各展示室にも随所にワークショップ的なブースがあり、たとえば恐竜の骨格標本の横に木製の骨格を組み立てるパズルがあり、ただ見るだけではなく触って理解することを大切にしていると感じられた。

科学技術館 小林成稔

【パワーハウス博物館】

パワーハウス博物館は従来、科学技術を中心とした博物館であったが、最近はそのに社会学やデザインといったテーマも加え、より多角的に科学技術を捉える試みが成されている。教育活動においてもそれが反映され、小学生から大学生クラスまで、あるいは家族向けといったような幅広い層に対応して、多種多様な教育プログラムが設定されている。学生対象だけでも年間約10万人の利用がある。

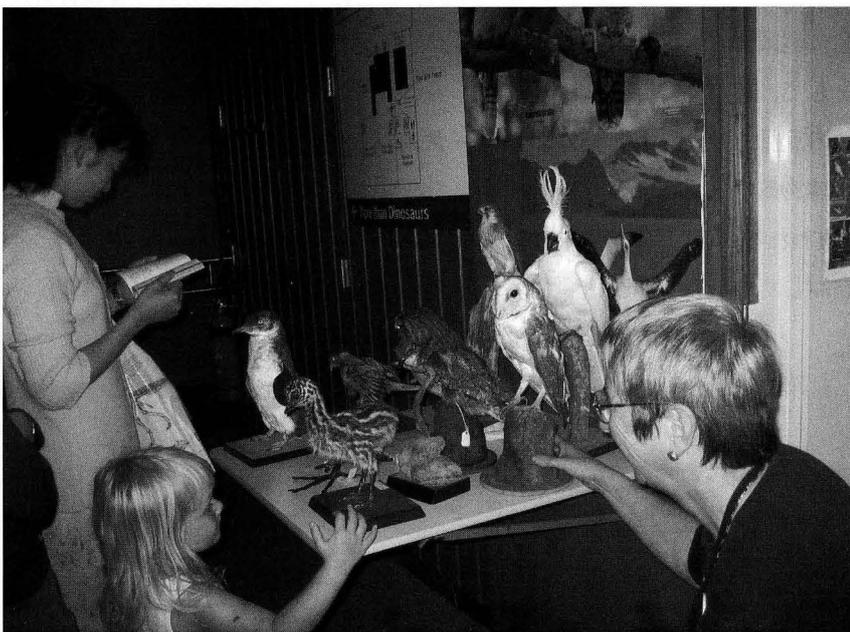
中でも、館内にある「Vector Lab」や「Sound House Vector Lab」といった実験室のような施設を使用した教育プログラムは、この館の特徴の一つであろう。前者には最新のコンピューターやビデオカメラが設置され、コンピューター・グラフィックスなどに挑戦でき、後者においてはコンピューターを使ったサウンド作りが楽しめる。学校から予約して授業の一部としての利用も可能であり、一般来館者向けのプログラムも用意されている。視察の際、実

際に子どもたちが楽しそうに取り組んでいたのが印象的であった。

また学齢前の児童のためのスペースがテーマごとに4カ所に設置されている。科学技術をシンプルに見せる展示や道具によって、大人と一緒に遊びながら学ぶことを意図しているということであった。

その他にも移動博物館を実施したり、Teachers Guideなどをwebsiteで公開したりと、教育普及に関して意欲的な活動を展開しており、それが利用者にも受け入れられているように感じた。

交通博物館 川野敬子



オーストラリア博物館

【テ・パパ博物館】

テ・パパ博物館は、1998年2月に開館し年間入場者数が130万以上を超える南半球でも有数の規模の博物館である。5階建ての館内では、この国が大切にしている1国2文化の精神や自然環境、さらにはアートなどについて学ぶことが出来る。

現在、NZ国内の学校のカリキュラムに合わせて約20のスクールプログラムを用意し博物館学習を展開している。これまでの実績では年間約3万人の児童が利用している。利用者（教員）は、

展示のなかでも自然、歴史、アートなど希望するジャンルを自由に選択して授業を行うことが出来る。さらには、博物館に来なくても教員がオンラインでアクセスし、資料として利用できるようになっている。これらのプログラムは、博物館の研究員（キュレーター）ではなく教育チーム（登録教員や教員のOBなど）が中心となり作成している。

また、館内には「ディスカバリーセンター」と呼ばれる子ども向けの学習コーナーが展示テーマごとに4ヶ所（自然・マオリ文化・島嶼の歴史・アート）設置されている。ここでは、子どもたちをサポートするインストラクター的なスタッフ数名が常駐し、所蔵のコレクションやPCをはじめ



テ・パパ博物館

めとする視聴覚メディアを用いて子どもたちの心をうまく捉え、物の見方や考え方を楽しみながら引き出す工夫をしている。さらに、子ども向けのワークシートは31種類と非常に充実しており有料(NZ\$ 2.00~4.00)であるが、実際に利用している子どもの姿も多く目にする事ができた。ウォーターフロントという立地条件のため観光施設としての性格も併せ持つが、娯楽的なアプローチをうまく使いながら地元の人々だけでなく観光客でも色々と学ぶことができる施設として今後の活動にも注目したい施設である。

碧南海浜水族館 碧南市青少年海の科学館 地村佳純
光記念館 山内英昌

「人が集う空間」という意味を、ノムラはいつもトータルで考えています。

集まる理由を、ノムラは知っています。

集客環境づくりの調査・コンサルティング・企画・デザイン、設計・制作施工ならびに各種施設・イベントの活性化・運営管理

NOMURA <http://www.nomurakougei.co.jp>
株式会社 乃村工芸社 本社：東京都港区芝浦4-6-4 電話03-3455-1171(代)

調査・企画・デザイン・設計・製作・施工・
監理・運営およびコンサルティング・プロデュース

より良い「社会交流空間づくり」にむけて…。

株式会社 丹青社

〒110-0005 東京都台東区上野5-2-2 TEL 03-3836-7221(代表)
札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・鳥取・福岡
URL <http://www.tanseisha.co.jp>

モンタナ州立大学博物館で、爬虫類展を5月にオープンへ

モンタナ州立大学のロッキー博物館（モンタナ州ボーズマン）では、爬虫類をテーマにした特別展が、2006年5月27日に開幕する。ヘビをはじめ、トカゲ、カメやワニが、それぞれに適した生態環境を再現した屋内展示で紹介されることになっている。紹介される爬虫類は、いずれも昔から人々（西欧文化圏）が迷信をもって誤解してきた種類が選ばれ、同展ではかれらに対するそうした誤解を払拭し、正しい理解を植え付けることが目的になっている。アメリカにある私立の爬虫類園レプタイランド（ペンシルバニア州アレンウッド）が企画制作した同展は、1999年からリバティー科学館を皮切りに、全米各地の動物園、科学館、自然史博物館、海洋科学博物館を会場に巡回してきた。ボーズマンでの開催は2006年10月6日まで。

Reptiles: The Beautiful and the Deadly.

Museum of the Rockies, Bozeman.

<http://museumoftherockies.org/>

<http://www.reptiland.com/allenwood.html>

サイエンスワークスで、生物の形質をテーマにした特別展を開催中

触察に重点を置いたことで知られているサイエンスワークス科学館（オレゴン州アッシュランド）では、生物の形質をテーマにした特別展が、2006年2月11日より開催されている。さまざまな生物に見られる多様な生き方とすべての生物に共通な形質についての紹介がされている。同展は、もともとエクスプロラトリウムが2002年10月にオープンした同名の常設展示を土台にした巡回展であり、全米各地を開催している。開催中に、ミミズ、チョウ、猛禽類、オオカミを使った関連のイベントが開かれている。アッシュランドでの開催は、2006年5月31日まで。Traits of Life. ScienceWorks Hands-On Museum, Ashland.

<http://www.scienceworksmuseum.org/>

<http://www.exploratorium.edu/traits/index.html>

ワシントン大学博物館で、ニュージーランドの鳥類展を開催中

ワシントン大学パーク自然史博物館（シアトル）では、ニュージーランドの代表的な鳥類を紹介した特別展が、2006年3月13日より開催されている。絶滅危惧種に指定されて

いるキーウィやケルル等の在来種が剥製で紹介されている。これらの鳥類の羽根は、同時に開催されているニュージーランドのマオリ族現代工芸展で展示されているバスケットや外套などで使われている。シアトルでの開催は、2006年5月29日まで。

New Zealand's Birds: Used by Maori with Respect and Admiration.

Burke Museum of Natural History, Seattle.

<http://www.washington.edu/burkemuseum/>

米ボルチモア水族館で、豪州の野生動物を紹介した常設展をオープン

ワシントンDCに隣接するメリーランド州の最大の観光施設であるボルチモア水族館は、1981年の開館以来、魚類を中心とした海洋生物だけでなく、野心的に内陸部の水辺に棲む動物の生態をも飼育展示で取り上げてきたことで有名だ。そうした伝統の延長線上で、今度はオーストラリアの北部準州（Northern Territory）に棲む動物達を紹介した常設の飼育展示コーナーを2005年12月16日にオープンした。北部準州のウムブラワ峡谷を模した展示（約6,000m²）の中心は、鉄筋コンクリートのビルでいうと12階までの高さがあるウムブラワ峡谷の断崖ジオラマだ。在来種の鳥類が訪れる観客の頭上を飛び交っているし、また目の前で陽光によって温められた岩の上で昼寝をきめこんでいるトカゲも見ることができる。

同展で紹介されている在来種は、オーストラリアン・レインボー、バラマンディ、オーストラリアハイギョ等の魚類をはじめ、爬虫類ではスポンモドキ、オーストラリアワニ、ヘビクビガメ、ブラックヘッドパイソ、エリマキトカゲ等が見れる。またその他にゴシキセイガイインコ、ワライカワセミ等の鳥類とハイガシラオオコウモリ等の珍しい哺乳類も見れる。いずれも周辺が乾いた大地に囲まれているウムブラワ峡谷の水辺に依存している動物たちだ。総工費8000万ドル。

Animal Planet Australia: Wild Extremes.

National Aquarium in Baltimore.

<http://www.aqua.org/australia.html>

<http://www.pbase.com/thunor/image/12933193>

<http://www.ingrids-welt.de/reise/aus/htm/npum->

ba2.htm

オレゴン州立大学海洋科学展示館で、生物学的侵入を取り上げた常設展がオープン

オレゴン州立大学ハットフィールド海洋科学ビジターセンター（オレゴン州ニューポート）では、1965年の開設以来、オレゴン州立大学で行われている海洋科学の研究成果を精力的に紹介してきている。いっぽう近年では、連邦政府のの事業である「沿岸エコシステム学習センター」のネットワークの一つとして、沿岸の環境破壊に対する啓蒙活動も、ボルチモア水族館やモンレー水族館等の同僚館とともに、積極的な活動を展開している。

このほど同館では、外来種の生物がどのように在来種の生態圏を侵し、そしてどのように在来種を減らしていくかを紹介した常設展を、2006年2月26日にオープンした。

日本でも、ロシア原産の外来種カワホトトギスガイや、台湾シジミ種群の侵入に対して警戒が強まっているが、同展でもこれらの生物外来種の侵略が米国内で深刻になっている状況を紹介している。

同展では、単に外来種による在来種の生態系の破壊だけでなく、漁業等の莫大な経済的な損失をもカバーしている。このユニークな常設展は、広範囲な層の関心を引きつけるために、B級ホラー映画の演出方法を展示の中で多く用いているものの、伝えようとしているメッセージがちきんと考えられており、そしてその具体的な表現手法ができていて、ビジターセンターへの見学が単なる娯楽的な体験で終止することなく、環境意識を植え付けることに成功しているようだ。関連のイベントも通年開催される計画だ。

Invasion of the Habitat Snatchers.

Hatfield Marine Science Visitor Center, Newport.

Coastal Ecosystem Learning Center.

<http://hmssc.oregonstate.edu/visitor/index.html>

<http://www.coastalamerica.gov/>

全面改装のために、アメリカ国立歴史博物館が秋から休館

今年で完成から42年目になるアメリカ国立歴史博物館が、老朽化が目立つ建物の全面改装をすることになり、2006年9月6日より館内のすべての展示がしばらく見れなくなる。

今回の全面改装で新しく設けられるものの一つに、入館者を迎える「ウェルカム・センター」がある。正面玄関の近くに設けられるこの空間（コーナーかあるいは一つのホールか）では、画像データベースを使ってアメリカ国立歴

史博物館の所蔵品の詳しい内容を入館者に提供し、あわせて米国の歴史をスナップ写真風に紹介した展示が用意されることになっており、いわばオリエンテーション機能をもった空間が計画されている。またアメリカの発明と技術革新の学習機能をもったレメル・センターにも新しく展示ギャラリーが設けられる。設計は、同じスミソニアン機構の国立美術館の屋外彫刻園とハーシュホーン美術館の彫刻園の設計を手がけたスキッドモア・オーウィンズ・メリル建築設計事務所が担当することになっている。

2年間の工事期間中は、巡回展の事業以外は、展示の公開活動が停止される。その代わり、ワシントンDC中心部の各所で、同館の仮設の展示館が用意され、展示活動の継続が継続されている。その中で、日本の科学博物館関係者の間で馴染み深い「アメリカ人の生活の中にある科学 Science in American Life」と、「情報化の時代 Information Age: People, Information & Technology」が入っているかは不明だ。

資料の収集活動、研究活動等は従来通り続けられることになっている（ならないという不安の声が大きい：現地の巷間筋）。また職員のほとんどは通常の業務を遂行することになっているが、同館内でショップの運営をしているスミソニアン・ビジネス・ベンチャー社は人員整理を行うことになっている。25人の常勤社員が他の博物館に配置転換されるが、多くのパート社員は全員解雇される見通しだ。

総工費8500ドルのうち、4500ドルが連邦政府より助成され、1600ドルがカリフォルニアの実業家であるケネス・H・ベーリング氏寄付基金から拠出されている。残りは広く民間から集められることになっている（氏は同館に2000ドルを1997年に、そして8000ドルを2000年に同館へ寄付しており、これらが同館内のケネス・H・ベーリング氏寄付基金を構成している）。今のアメリカ国立歴史博物館は、同館への最大の寄付提供者ケネス・H・ベーリングにちなんで、2000年より公式のサブタイトルに「ベーリングセンター」が付けられている。しかしながら、巷間では便宜的に後者を使うことに抵抗を感じる「抵抗勢力」が多いようだ。全工事の終了は2008年夏の子定。

National Museum of American History.

<http://americanhistory.si.edu/>

* (やすい・りょう)

E-post: ZAKvaran@aurora.ocn.ne.jp

5月6月の特別展

開催館	展覧会名	開催期間
旭川市科学館 サイバル	特別展「大空に飛ばたい恐竜たち」	4月22日～6月25日
むつ科学技術館	巡回展「電気をつくろう」(後援:財団法人つくば科学万博記念財団)	4月13日～7月13日
岩手県立博物館	「岩手鳥っこ」展	5月20日～7月2日
秋田県立博物館	秋田の先覚記念室・菅江真澄資料センター開設十周年記念展「明治文学と秋田～後藤宙外の文壇回顧録」	4月22日～6月18日
	同「真澄の肖像～旅人・うた人・くすし～」	
	企画展「なんで?科学のクイズ展」	6月24日～8月27日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「南天の天体たち」	4月1日～6月30日
ミュージアムパーク茨城県自然博物館	第36回企画展「サルを知りヒトを知るー自分たちを探る旅ー」	3月18日～6月18日
群馬県立自然史博物館	特別展「奥利根 その自然をさぐる」	3月18日～5月7日
さいたま市青少年宇宙科学館	企画展「インセクトトレック(昆虫展)」	4月22日～6月18日
狭山市立博物館	春期企画展「金田一さん! 出番です ～博物館で楽しむ横溝正史～」	3月18日～6月11日
埼玉県立自然史博物館	企画展「埼玉の自然美写真展」	4月1日～5月7日
	企画展「身近にいる新参者II」	4月1日～7月2日
千葉県立中央博物館	生態園トピックス展「春の鳥」	3月7日～5月7日
	春の展示「結晶とガラス」	3月11日～6月4日
逓信総合博物館	日本切手原画展(仮称)	6月3日～7月9日
国立科学博物館	特別展「世界遺産 ナスカ展 地上絵の創造者たち」	3月18日～6月18日
機械産業記念館(TEPIA)	「最先端技術展～日本の未来をひらく～」PARTIII	4月11日～7月21日
馬の博物館	春季特別展「馬事文化財団創立30周年記念 馬と牛ーひとつの蹄とふたつの蹄ー」	4月15日～6月4日
	テーマ展「馬と文学」	6月10日～8月6日
横浜子ども科学館	企画展「発見!かがみの城」	4月29日～6月18日
神奈川県立生命の星・地球博物館	企画展「学芸員の活動報告展」	4月29日～5月28日
黒部市吉田科学館	特別展「黒部市吉田科学館～歴史を刻んで20年～」	6月3日～9月3日
富山市科学文化センター	特集展示「バッタやコオロギとその仲間たち」	4月9日～6月4日
佐久市子ども未来館	開館5周年記念特別企画展「びっくり!ドッキリ!なるほどサイエンスPART-3」	3月4日～5月7日
	企画展「太陽を知ろう!発電しよう!ソーラーパーク」	6月3日～7月2日
岐阜県博物館	開館30周年特別展「緑いきいき!岐阜の森」	4月28日～6月25日
光記念館	「隕石・恐竜」展	6月1日～9月5日
中津川市鉱物博物館	第20回私の展示室「旅する種ー植物の知恵と工夫ー」	3月19日～7月2日
東海大学海洋科学博物館	海と恐竜のはくぶつかん祭り	4月29日～5月7日
東海大学自然史博物館		
豊橋市自然史博物館	市制100周年記念事業「ユカギルマンモスミュージアム」	4月8日～6月18日
	収蔵資料紹介展「カブトムシ」	4月22日～6月18日
産業技術記念館	企画展「トヨタコレクション 江戸のモノづくりー自然の時を刻む機械、カタログ文化ー」	4月18日～6月18日
トヨタ博物館	企画展「1980年代の日本車～若者に愛されたデートカー」	4月11日～6月25日
	ギャラリー展「クルマのアート大集合!」	4月11日～7月2日

開催館	展覧会名	開催期間
真珠博物館	特別企画「お伊勢さんと真珠王」	4月21日～6月30日
	KIM SO SUN「現代白磁に甦る朝鮮民画」(個展)	4月8日～5月31日
	特別展「真珠博物館の宝飾コレクション2006～ジュエリーの花園～」	4月21日～9月21日
鳥羽水族館	企画展「体感! おもいっきり飼育係展」	3月18日～2月12日
滋賀県立琵琶湖博物館	ギャラリー展示「つかんだ・つんだ・いつもいたーあの生き物は、いま・・・?」	4月29日～6月18日
	水族企画展示「ボテジャコは、いま・・・?」	4月29日～6月18日
伊丹市昆虫館	出版記念企画「虫のおりがみ2」	4月26日～7月10日
	企画展「虫のうんこ染め」	5月10日～7月10日
兵庫県立人と自然の博物館	企画展「古生代の世界」	2月18日～6月11日
明石市立天文科学館	特別展「彗星写真展」	4月15日～5月31日
	特別展「日本の日時計展」	6月3日～7月9日
出雲科学館	「光と芸術の科学 万華鏡展」	4月22日～5月7日
倉敷市立自然史博物館	特別陳列「みんなで作る自然の展示会2006」	4月25日～6月11日
吉備高原ニューサイエンス館	特別展「なんで? 科学のクイズ展」	4月28日～5月28日
防府市青少年科学館	特別展「地球環境展」	4月21日～6月4日
あすたむらんど徳島 子ども科学館	特別企画「サイエンススクエア」	4月29日～5月7日
宮崎県総合博物館	「新着! お宝公開展」	4月22日～6月11日

【展示更新】

郡山市ふれあい科学館 (福島県)

[展示室名] 展示ゾーン

[主なコーナー] びっくり実験ラボ

[展示面積] 約120m²

[オープンの期日] 平成18年3月11日

[準備期間] 基本設計・実施設計・施工期間等 2年

[担当業者] 設計・財団法人日本科学技術振興財団

施工・株式会社乃村工藝社、中野電工株式会社

[総工費] 46,389,000円



【リニューアルオープン】

神戸海洋博物館・カワサキワールド【Kawasaki Good Times World】

[主なコーナー]

ヒストリーコーナー…造船業から総合重工業へと発展した100年以上の歴史を紹介。／カワサキワールドシアター…幅広い製品を音と映像で紹介。／モーターサイクルギャラリー…歴代のKawasakiモーターサイクルの実車を数多く展示。／陸のゾーン…0系新幹線の実物やミニチュア鉄道模型を展示。／海のゾーン…神戸で建造している船の建造方法や、進水式の様子を3面マルチ映像で紹介。／空のゾーン…大型のKV107ヘリコプターの実物を展示。フライトシミュレータでは、来館者がパイロットとなり航空機の操縦を体験できる。／環境コーナー…新エネルギーの技術や地雷探知除去システムなど、これからの社会に向けた新しい取り組みを紹介。／パフォーマンスロボット…工場などで活躍している産業用ロボットが、ルービックキューブに挑戦する。

[展示面積] 1998m² (神戸海洋博物館1F大展示室)

[オープンの期日] 平成18年5月17日

[準備期間] 工事 平成17～18年度

[担当業者] 設計・施工 株式会社 大広

高品質表現力

文化施設・商業施設・動刻・ディスプレイ・デザイン・制御演出・施工

kokoro

株式会社 ココロ

〒205-8556 東京都羽村市神明台4丁目9番1号
TEL: 042-530-3939 FAX: 042-530-4050
<http://www.kokoro-dreams.co.jp/>

美術

はく製

〈各種生物〉
剥製・骨格標本・レプリカ
加工/販売/リース

有限会社 東洋近代美術研究所

製作所 〒272-0816 ☎047-337-5678
千葉県市川市本北方2-18-1 FAX 047-338-1978

本社 〒272-0834 千葉県市川市国分5-3-25 ☎047-374-1564
E-mail:toyobken@taupe.plala.or.jp



INTERIOR/EXTERIOR/DESIGN/EQUIPMENT

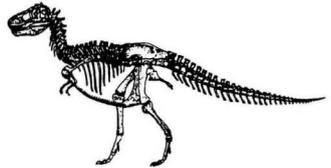
ONY KOBO CO.,LTD.

東京都千代田区神田神保町2-7-3シグマ神保町4階
TEL (03) 3221-1102代 FAX (03) 3221-1185



動物園/水族館/博物館
企画・設計・施工

※世界の化石・
鉱物・恐竜・化石
人類・動物骨格
標本及び模型の
輸入専門業者



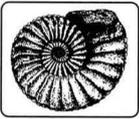
ティラノサウルス・REX

株式会社 ゼネラルサイエンス
コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802
TEL 03 (3583) 0731代表 FAX 03 (3584) 6247

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



地学標本(化石・鉱物・岩石)
古生物関係模型(レプリカ)

大英博物館/恐竜復元模型

since 1974

●常設ショールーム: 紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)

髯東京サイエンス

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
TEL.03(3350)6725 FAX.03(3350)6745
<http://www.tokyo-science.co.jp> E-mail:info@tokyo-science.co.jp

省スペース展示に最適な、小型ドームCG映像システム

メディアグローブ、誕生

メディアグローブは世界で初めてフルカラー
投映を可能にした小型・高精細のデジタル
プラネタリウム。さらにドーム全天に高画質な
CG映像を投映するマルチ投映機能を持ち、
さまざまなシーンで活躍します。

▶各種イベント等にも対応。レンタルもご相談ください。



コニカミノルタ プラネタリウム株式会社

東京事業所 〒163-0512 東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル12階 TEL (03) 3349-5301
大阪事業所 〒550-0005 大阪府大阪市西区西本町2-3-10 西本町インテス11階 TEL (06) 6110-0570
東海事業所 〒442-0067 愛知県豊川市金屋西町1-8 TEL (0533) 89-3570
URL: <http://konicaminolta.jp/planetarium/>

全科協ニュース編集委員会

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 資料課長

國府田良樹

千葉県立中央博物館 教育普及課長

森田利仁

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課長 井上透

全科協事務局

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課 守井典子

Tel.03-5814-9863 Fax.03-5814-9898

発行日 平成18年5月1日

発行 全国科学博物館協議会©

☎110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 島崎印刷株式会社